

## THE 北斎 —富嶽三十六景と幻の絵巻—

すみだ北斎美術館（墨田区） 2021. 07. 20～09. 26 一部展示替えあり

「すみだ美術館」は、江戸時代後期の浮世絵師「葛飾北斎」が本所界限（現在の墨田区の一部）で生涯を送ったことなどに加え、当時の南割下水に相当する現在の「北斎通り」の線上にある亀沢もゆかりの地に含まれることから当地に開館したもので、2009年4月に従来の北斎館を改称した館である。

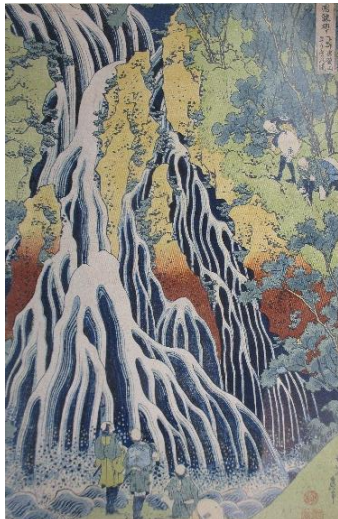
葛飾北斎 《諸国瀧廻り 木曾路の奥阿弥陀が滝》1833（天保4年）



岐阜県郡上市白鳥町の長良川の源流の一つの「阿弥陀が滝」は、落差は約60m、幅約7mの白山信仰の修験の滝として古くから多くの人々が訪れている。

円形の滝口は、「観世水（かんぜみず）」（渦を巻いた水の文様）のように描き、滝水は何本もの水流に分れて垂直に落下している光景は、滝口がまるでえぐれて望遠鏡で覗いたような溪流の流れが、魔法の鏡に映されたようである。滝の背後は濃い藍色、断崖の上で平然と滝見に興ずる人など、滝口水の下半分は軽くグラデーションをかけ滝が立体的に描かれている作品である。

葛飾北斎 《諸国瀧廻り 下野黒髪山きりふりの滝》1833（天保4）年頃



日光の三名瀑のひとつ「黒髪の滝」を描いた作品は、幾筋に分かれて落下する水が動感豊かに表現されていて、その滝にじっと見入る人々の静的な描写と好対称をなしている。岩間を流れ落ちる滝水は、まるで巨木の根のようで、画面下で飛沫を浴びながら滝を見上げる旅人、右手の中段には滝を見下ろす人物を配して、滝のスケールの大きさを強調している。

「北斎」の描く滝は、まるで葉脈のようであり、うごめく有機体のようにも見える発想の素晴らしさには驚かされ、画伯の想像力にかかると、このような気味悪い滝の様子に化けてしまう。

他の滝浴みの作品は、《相州大山ろうべんの滝》《和州吉野義経馬洗滝》《東海道坂ノ下清滝くわんおん》《美濃ノ国養老の滝》《東都葵が岡の滝》《木曾街道小野ノ幕府》などが展示されている。